

## 「チャペルの思い出」

酢屋善元（1958年英文科卒）

私が明治学院中学校に入学したのが、昭和23年の4月、学校の一日は、毎朝の礼拝から始まりました。先ず校庭に高校生、中学生と整列して、高学年から一クラスごとに礼拝堂に入場しました。

当時は、聖書は文語体のもので、讃美歌も縦書きの古い版のものでした。最後のページに「君が代」が載っていて、小さな活字で、しかも括弧書きで、

（便宜上ここに収む。本書の歌にあらず）

と記されています。

私の手元にある縦書きの讃美歌は、私の中学生当時に母が入手したもので、1冊は母の棺に入れた残りの1冊です。母の遺品だったので、今、手元にあります。当時自分で使っていたものは、何度か引っ越しをしたり、過去を振り切るために、身の回りのもの整理して、ことごとく捨ててしまったので、中学・高校・大学当時のものは、今は何も有りません。この縦書きの讃美歌の後ろの表紙の裏に、昭和7年12月10日6日版とあり、横にゴム印で

[定価金七拾五圓 この讃美歌は米国にある教会世界奉仕聯盟より寄贈せられた第二回分のもので、定価以上に領布は出来ません]

と捺印してあります。

この讃美歌に437番、「使徒の生涯・母の日」の讃美歌が載っています。

- 1番が「母ぎみに勝るともや世にある  
生命の春にも老の秋にも  
優しく勞りいとしみたまふ  
母ぎみに勝るともや世にある」
- 2番は「母ぎみに勝るともや世にある  
ゑまひも涙もともにわかちて  
夕べの禱りにこころをあはす  
母ぎみに勝るともや世にある」

と歌詞が書かれています。メロディーは、「慈しみ深きともなるイエスは」、と同じです。

当時の中学に英語の山本先生、お名前の方は思い出せないのですが、山本という苗字と、あだ名が確か「ボケなす」でした。この先生は、よく朝の礼拝で説教を担当され、いつもお母さんの話をされました。そして、讃美歌は必ず、437番「母ぎみに勝る」を指定しました。

指定したと言うより、ボケなすと言えば、最初から「母ぎみに勝る」、でした。

でも、高校時代に讃美歌が改定され、新しい版からこの曲が削除されました。それまで、山本先生は、颯爽と登壇され、母の話と「母ぎみに勝る」を、声高らかにうたっておられました。新讃美歌から先生の愛唱讃美歌が削除されて、何かしょんぼりされていたような印象が残っています。

現在も、讃美歌21になって、年配の方々の愛唱讃美歌が無くなったり、歌詞が変更されて、親しみが持てないとお話を聞きます。私の教会では毎月第4週目の日曜日、礼拝後に、古い讃美歌を歌う会を続けています。

中学生当時、礼拝用には

本物の讃美歌ではなく、「明治学院讃美歌」だったと思いますが、何曲か抜粋した、楽譜が無くて歌詞カードを綴った様な小冊子を皆が持っていました。礼拝が朝だけなので、先ず2番の「くるあさごとにあさひとともに 神のひかりをこころにうけて みいつくしみをあらたにさとる」や、9番の「父の神よ夜はさりて あらたなる朝となりぬ われらはいま御前にいでて 御名をあがむ」などは、よく歌われました。

当時の礼拝堂は、創建当時と同じように祭壇の部分がこじんまりとして、古い手漕ぎのオルガンと（祭壇の裏で手動式のポンプでオルガンに空気を送るもの）、アップライトのピアノが備えられていて、讃美歌の伴奏はピアノだったように記憶しています。現在の祭壇は、創建当時の姿に戻されています。園部君が導入したパイプオルガンが、正面の祭壇に設置されたのは、我々が卒業した後で、現在礼拝堂の入り口側2階席に設置されているパイプオルガンは、我々からみればごく最近のものです。

礼拝堂の両袖の部分は、あとから増築されたと聞きますが、昔は縦と横の継ぎ目、境界に渡された幅広の梁が、屋根の重みでしょうか、ややしなっていたような記憶があります。現在、耐震工事後の梁は、水平にしっかりと屋根を支えているようで、安心しています。

とにかく屋根を支えている、斜めに交差している柱組は、荘厳で美しいですね。

中学時代は意味もわからずに説教を聞いていたように思いますが、村田四郎先生と高橋源治先生（お名前が正確ではないかもしれませんが）の説教は、圧巻でした、迫力があり、説得力があり、大変に勇気づけられ、力づけられ、励まされました。そしてその一日が何となく、気持ちよく過ごせました。

中学一年生の時の担任は、矢作弥寿彦先生でした。矢作先生も説教を担当され、村田先生や高橋先生とは正反対に、静かに語りかけるような話し方でした。当時の礼拝では、確かマイクは無かったように思います。ですから村田・高橋両先生の説教は正に演説でもあり、大きな声ではつきと語っておられました。礼拝中に生徒の私語があると、説教が聞きづらく、生活指導の先生、お名前は忘れましたが、あだ名は「ケロ」、「ケロ」が足音をたてないように席の周りをまわって、注意していました。ある時、たまたま私の後ろの席が騒ぎ出し、それが私の横の席に伝染したと思いたら、気がついた時には私の列の通路に「ケロ」が立っていて、君の名前はと聞かれました。あとで呼び出されて、礼拝を侮辱したとか、お説教を食らいました。私を明治学院の中学にと勧めて下さった先生が、雪谷の自宅に両親を訪ねて来られ、私が礼拝中に騒いだと告げましたので、家でもまた叱られました。

最初に後ろの席で騒いでいた奴は、小学校からの友達でしたが、彼曰く、私に対して、君たちは要領が悪いから「ケロ」に捕まったので、後ろの席が静かにしたので捕

まらなかった。そのことに気がつかないのは、ちょっと「トロイ」のではないか、と忠告されました。この要領が悪いと言う忠告が、一番こたえました。

文中、先生、先生と書きましたが、明治学院中学高校では、教官を生徒呼ぶ場合に、先生とは呼ばないで、何々さんと、さん付で呼ぶことになっていましたから、担任も矢作先生では無く、矢作さんでした。ある時、原田さん（先生）から、何かの席で「うちの学校は先生では無くてさん付だよな」と話しかけられた時に、「そうですが、原田先生の場合は、皆『ハラダ、ハラダ』と呼び捨てにしています」と正直に答えて、睨まれたことがあります。

当時は制服・制帽、要するに詰襟で黒の学生服に金ボタン5個、学生帽には正面にMGの徽章、襟には1Aとか1Bと学年とクラスのバッジをつけることになっていました。ときどき礼拝前に服装検査があり、その頃には明治学院の前の徽章屋に生徒が押し寄せ、新しい学年のバッジや、紛失したバッジやボタンなどを買い入れました。誰かが、「ケロ」の一声でこの店は儲かってしょうがないな、などと大声を出すともみんなが爆笑するような一幕もありました。

礼拝堂のてっぺん、尖塔の先に鳥が止まっていることがありました。ジックスというか、あそこに鳥が止まると何か良い事がある、つまり休講があると言うので、よくあのとてっぺんを見上げました。あとで考えると、余り当たらなかつたように思いますが。

当時は明治学院は男子校でしたから、全員が黒の学生服に学生帽で、校庭に整列すると一面の黒、金ボタンだけがキラキラと輝くそんなキャンパス風景でした。ある時、高等学校の同窓会で礼拝があり、その日は礼拝には遅刻して参加しましたが、後ろの扉を開けて中を見た瞬間、堂内に男性ばかりがぎっしりと着席して、その後ろ姿に圧倒されました。教会とか礼拝では、今は必ず後ろの席のあたりには女性がいますが、男性ばかりで、一瞬、中学高校時代がよみがえった様な衝撃を、感じてしまったのです。

島崎藤村の明治学院校歌に「学院の鐘は響きて、吾ひとの胸うつところ」とあります。先日貴兄（麓氏）が礼拝堂には鐘が無いと仰っておられましたが、確かに礼拝堂の鐘は聞いたことがありません。

我々の時代には高等学校の校舎に、その玄関の突き出した大きな庇の下に、鐘が吊り下げられていました。今だったら多分ベルを鳴らすのですが、当時は授業の開始と終了の時刻ごとに、鐘がなっていました。鐘をつくのは、「ダム」のお仕事でした。なぜ「ダム」なのかは、「ノートルダム」だからだと聞きましたが、当時はなるほどと思い、まさにぴったりのあだ名だったと思いました。彼は丁度、火事だ火事だと半狂乱のように半鐘を打ちならすように、強く激しく早いピッチで、力いっぱい連続して鐘を打ち続けるので、歌に歌われるような優雅の情景とは全く縁遠いものでした。のどかにカーン、カーンと余韻をひきながら鳴らすのではなく、うまく表現できませんが、カッカカカカカーンという感じです。つまらない授業の時には、或いは自分が先生に指されないように、「ダム」が間違えて、早く鐘を打つてくれないかなと、祈るような気分でした。

大学時代に、合唱団に所属していて、ルーテルアワーの讃美歌の練習を、礼拝堂でした記憶があります。真冬の夕方、暖房もなく、冷え切った礼拝堂は、がたがたと胴震いするぐらいに寒く、今から思えば、よく耐えたものだなとの感があります。あの当時は、夏は暑く、冬は寒いのが当たり前でしたから、文句を言う前に、耐えられる自分であることが求められていました。

もちろん、教室でも冷暖房などなく、冬はストーブで、休み時間にはストーブの周りに集まって暖をとるくらいで、当然、誰がどの辺でストーブにあたるか、自然に決まっていたようです。夏は、本格的に暑い頃は、長期休暇で、学校には誰もいませんでしたから、冷房など贅沢で、要らないと言っても通用したのですね。

まあ、中学・高校・大学と明治学院には10年間もお世話になりましたが、学生時代ぼんやりとしていたせいも、あまり記憶に残っていることはありませんが、高校から大学に進学する頃、進路の選択に際し、高橋源次さんから、金儲けをしたい人は慶応義塾の経済へ、お金の正しい使い方を学びたい人は、本学、明治学院の大学に来なさいと言われたことは今でも鮮明に記憶しています。

考えてみると、正しいお金の使い方など教える学校は、いまでも日本には無いのではないかと思います。もし今の政治家や地方の長、知事達が、それを学んでいたら、日本はもっとまともな国になっていてもよいわけですから、温故知新というか、今からでも遅くないので、明治学院の教育方針として、アピールしてもよいように思います。が如何でしょうか。